
the nobleness of kingdom ~ ハーレ王国の人々 ~

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the nobleness of kingdom ハーレ王国の人々

【Nコード】

N5302V

【作者名】

RAN

【あらすじ】

小説SNS dNovelsの関係者を使って妄想お話をついた上でしたものを、個人的にいいように脚色しています。dノベ転載。

ここはどこでもない国。ハーレ王国。

誰かの空想の世界かもしれないし、みんなの空想の世界に潜んでいるかもしれない。

その国のある貴族の家に仕える騎士イノルは、ある悩みに頭を抱えていた。

仕える家の令嬢らんに恋をしていた。

勇気を出して声をかけ、話をするようになった。

そして、ついには彼女の護衛を務めることになった。

しかし、彼女の護衛を務めるようになり、彼女の側にいることが多くなつてわかったことがある。

声をかける者がもう一人いたのだ。

にしという名の国王の住まう城の騎士だった。

だが、彼にはきていという名のフィアンセがいた。

フィアンセがいるのに、他の女性に声をかけるのだ。

さらには禄という姫とも密かに会つていという噂もある。

会つていというよりは、禄姫がにしのに手紙を送つたりして、想つていという事のようなのだ。

イノルと禄は、家同士が仲が良く、幼い頃から知つている間柄でもあつた。

だから禄自身から直接聞いているわけなのだが。

このことも、イノル自身に複雑な感情を抱かせていた。

にしという騎士はそうだった。いわゆる女好きなのである。

イノルはそういう所でもしのを嫌つていたが、別の理由でも対立していた。

イノルの自分の仕事、仕えていることに誇りを持っていたが、に

しのは城に仕える騎士。

格もやはり上である。女性問題はあったものの、仕事に関しては優秀だった。

武術の面でもスマートな動きをし、頭の回転も早かった。嫉妬にも似た、そういう思いも、イノルにはあった。

「どうかされましたか？ イノル様？」

らの声でイノルは我にかえった。

庭に出ると言ったらんについていたところ、つい考え事をしてしまったようだ。

イノルは自分を心の中で叱咤する。

「いえ、失礼いたしました。少し考え事をしておりました」

「……何か、心配ごとがあるのですか？」

らは、その顔を悲しげにくもらせる。

イノルは慌てた。

「姫様と一緒にいらっしやるのに失礼いたしました。仕事のことを考えていたのです。職業病ですのでお気になさいますねよう」

冗談めかした笑みを浮かべて、イノルは答えた。

らは、ただ笑みを返した。

ある日、一通の手紙が凧のような平穏な日々、風を起こした。

きょうすけと名乗る男が人目を忍ぶように、地味な色の布をかぶってやってきた。

ハーレ王国をおさめる、しの王からのものであった。

それは、らんを妃に迎えたいという内容のものであった。

まさに青天の霹靂。特に名のある家柄でもないらんの家になぜ突然手紙が運ばれてきたのか。

疑問を感じつつも、正式ではないとはいえ王様からの手紙であるようだ。印とサインがある。

納得がいかないのは、イノルも同じであった。さらに、もっと複雑な思いがある。

それは、不満というものにも近かった。

数日後。しの王に謁見したが、イノルの何かの間違いであってほしいという思いも通じず、全く手紙のとおりであった。

しかも、その当日に結婚式の日取りまで決めてしまった。

三ヶ月後。しかし、しの王の真意は見えない。

数ヶ月たち、結婚式前夜。

「らん様……？」

夜、屋敷の庭を警護がてら歩いていると、イノルは人影を見つけた。

その人影は驚いたようにびくりと肩を震わせたが、月明かりがその姿をうつして安心したように微笑んだ。

「イノル様でしたか。何だか眠れなくて……」

「明日、いよいよご結婚されるのですね」

イノルはできるだけ平静を装って聞いた。

らんの眉が少し歪む。笑顔が少し揺れた。

「なんだか夢の中にいるみたい。現実のように感じる事ができません」

イノルは、ただ黙っているしかできなかった。

結婚式当日。ざわめく会場。

式は順調に終わり、披露宴が始まるうとしていた。

「静まれみななもの。心清きもののみ、我が国に住むが良い。我がハーレ王国に！」

威厳のある声が響き渡り、人々は声のした広間中央の階段の上を見上げる。

階段の上にはいたのは、しの王だ。

優雅な足取りで、階段を降りてくる。

同時に、広間入り口のドアも開いた。

客が一斉にそちらを向く。

扉の向こうには、美しい光沢の布でできた、清楚な色合いの白と黄色のドレスを身にまとったらんがいた。

ゆっくりとした足取りでらんも広間の中央へ向かい出す。

客は自然と道を作り、二人は広間の真ん中で向かい合った。

イノルは見てられず、視線をそらし、顔をうつむかせた。

式の終わった夜。

新婚初夜の夫婦がそうであるよう、しの王とらんも同室にいた。

しかし、ついこのあいだ会ったばかりの王に、らんは親愛を感じることができず、ただ緊張して椅子に座っていた。

しの王も、静かに部屋の窓から外を眺めていた。

「……らん……？」

名前を呼ばれ、らんは大きな動作でしの王の方を見た。

しの王は、ゆっくりと体を少し傾けてらんを見た。

月明かりに照らされ、少し視線が鋭く見え、らんは背筋に寒気を感じた。

「……君に、どうして私が妃になってほしいと言ったか、話さなければならぬ……」

らんは、何も言えず、唾を飲んだ。

イノルは屋敷の自室にいた。

何にも手をつけられず、ただ椅子に座り、机や窓の外に目を移すことを繰り返していた。

急に、イノルは机を強くたたいて、立ち上がった。

早足で、だが夜なので静かに、イノルは外へと向かった。

馬屋に行き、愛馬の背に乗って、夜の闇の中、彼は駆け出して行

った。

らん！ やっぱり君だけだ！！ 君じゃないと駄目なんだ！

らんは、しばらく呆然としの王を見つめていた。

「突然のことで、君には悪いと思っている。だが、君には私に協力してもらいたい。この王国のために」

らんは少し視線をさまよわせていたが、静かにうなずいた。

しの王は、らんを正面に向けた。

その顔の笑みは、一層濃くなった。

私のお話はここまで。さあ、あとは貴方次第。

貴方は、何を望みますか？

【パート1】

らんを忘れられずにいるイノル騎士。

その想いは夜毎につのり、いばらの様にからみつく。

らんもまた同じく心を痛める。

しかして相手は強大たるしの王。

果たしてイノルは、愛しきらんを奪い返せるのか。

次回「ほし騎士の行方」！

【パート2】

らん姫としの王を遠くから眺めみる、メイドのナオヒラ。

彼女はしの王に心を寄せていた。

もちろん身分の違いから、遠くで見つめるだけだったが。

らん姫の登場で彼女の身も心も千切れんばかりだった。

しかししの王の命令により、イノル騎士に忍び寄っていくナオヒラ。心揺れるイノル。しの王の罠とも知らず。

しの王から奪い取るも、また再びしの王の手に落ちるらん。

イノルは後悔するも、すでにあとの祭り。

しかしそこへ　！？

パートの文章はついったーで参加してくださったものを改変して使用いたしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5302v/>

the nobleness of kingdom ~ ハーレ王国の人々 ~

2011年8月6日03時25分発行